

機関番号：32415
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2009～2010
 課題番号：21730597
 研究課題名（和文） 相互作用場面における心的用語・自称詞の使用とその機能：他者視点獲得との関連から
 研究課題名（英文） The use and function of the first-person pronoun and mental terms during interaction: Relation to perspective of others
 研究代表者
 長田 瑞恵（NAGATA MIZUE）
 十文字学園女子大学・人間生活学部・准教授
 研究者番号：80348325

研究成果の概要（和文）：相互作用場面における幼児の自称詞・心的用語の使用や機能を検討した結果、次の6点が示された。(1)一人称代名詞を使う幼児は相手に応じて自称詞を使い分けた。(2)自称詞の獲得は心理的他者視点と関連した。(3)自称詞使用は心的用語使用と関連した。(4)自称詞使用は自身の心的属性を語る能力と関連した。(5)心的用語を使わない幼児は神経質な印象を与え、心的用語を使う幼児は発達の進んだ印象を与えた。(6)幼児が心的用語を使う場合、その幼児に対して発達が速い印象が強いほど、大人が使用する心的用語数が少なかった。

研究成果の概要（英文）：The following six points were suggested as a result of the examination of the use and function of the first-person pronoun and mental terms by preschoolers during interaction. (1) Preschoolers who used the first-person pronoun also changed the person pronoun terms depending on their partner; (2) the acquisition of first-person pronoun terms was associated with psychological perspective of others; (3) the use of first-person pronoun terms was related to the use of mental terms; (4) the children's use of first-person pronoun terms was related to the ability to describe their own psychological attributes; (5) children who didn't use mental terms came across as nervous while children who used mental terms came across as being more developed; (6) when children used mental terms, the stronger the impression of being more developed the children made, the less mental terms was used by adults.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・実験心理学

キーワード：言語・心的用語・自称詞・他者視点

1. 研究開始当初の背景

子どもや大人が自分や他者の心をどのように理解し、心についてどのように語るのかを明らかにすることは非常に重要である。なぜなら、自分自身や他者の心について理解することは、日常生活の中で社会的に上手く振る舞ったり、様々な場面で自分自身をコントロールしたりするためには、非常に重要だからである(e.g., Clark, 1987)。

心についての子どもの理解に関しては、「心の理論(e.g., Perner, 1991; Wellman, 1990)」の発達に関する研究を中心に行われてきた。しかし、心の健康や社会生活での適応の問題が重要視されている昨今、心についての理解が実際の生活の中でどのように表現され、社会生活の中でどのような機能を果たすのか検討することが重要であろう。

心についての理解が社会生活の中で果たす機能について明らかにする一つの糸口として、心的用語が挙げられる。いくつかの観察研究から、幼児は心的用語を非常に早くから産出し、その産出順序には一定の文化的普遍性と文化的差異があることなどが示されている。また、心的用語の理解・産出と心の様々な側面についての理解との関連を検討した研究から、両者の関連性が示されてきた。そして、興味深いことに、幼児期初期は他者についてではなく、主に自分自身のことを表現するために心的用語を用いることが示されている(Booth, et al., 1997)。

ここで心的用語を用いて、自分自身のことだけでなく、他者についても言及できるようになるためには、自己と他者の区別がつき、他者とは異なるものとしての自我の発達が必須であり、他者視点がとれる必要があると考えられる。なぜなら、他者の視点が獲得されて初めて、時には自分とは異なる他者の心的状態・過程を推測可能となると考えられるからである。

一方、自我の発達を表すものの一つに自称詞がある(西川, 2003)。子どもたちは2歳過ぎから主に自分の愛称(3人称)を名乗って他者との区別を明確にし(西川, 2003)。その後、3歳頃から三人称で呼ぶのをやめ一人称代名詞を用いるようになる(Wallon, 1956/1983)。このように自称詞は他者との区別において自我と関連して獲得されはじめると考えられる(西川, 2003)。すなわち、自称詞の獲得にも自分とは異なるものとしての自我の発達や他者視点的獲得が関連していると考えられる。

このように、心的用語の使用においても、自称詞の使用においても、ともに自我の発達、他者視点的獲得が関連していると予想されるにもかかわらず、これまで、両者が同じ研究の流れの中で検討されることはなかった。

2. 研究の目的

以上の学術的背景をふまえて、本研究では以下の問題を検討する。第1に、心的動詞や自称詞の使用と、他者視点的獲得との関連の有無を検討し、関連する場合には、具体的な関連の仕方について検討する。Figure 1に示したように、心的動詞を他者に言及するために使用することや自称詞の獲得が、ともに自我の発達や他者視点的獲得に関連しているのであれば、心的動詞の使用法や自称詞の獲得は、心の理論研究で用いられてきた他者視点的獲得(例えば他者の誤信念の理解)の指標と関連することが予想される。さらに、心的用語を他者への言及のために使用すること、一人称自称詞の獲得とは、発達の同じ時期に出現すると予想される。

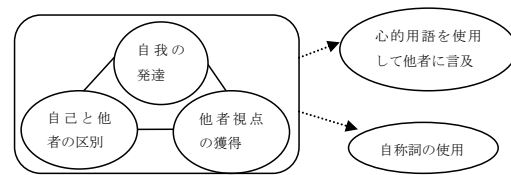


Figure 1 自我の発達・心的用語・自称詞：予想される関連

第2に、相互作用場面において、相互作用の相手が子どもの心的用語や自称詞の使用からどのような影響を受けているのかを検討する。心的用語に関しては、母子相互作用場面を検討対象とした先行研究の多くでは、母親から子へという方向の影響を中心に検討してきた。しかし、母子関係は双方向的なものであり(Sameroff, 1975)、相互作用の中では母親が子へ影響を与えると同時に、子もまた母親へ影響を与え、母親の行動を調整していると考えられるならば、子の発話の仕方が母親の行動を変容させる可能性は否定できない。Figure 1で仮定したように、自我の発達の表れとして心的用語や自称詞が使用されるのであれば、大人は、これらを使用する子どもに対しては「自我の発達した」子どもという印象を形成するのではないだろうか。

3. 研究の方法

(1) 自称詞の使用と他者視点的獲得との関連、心的用語の使用：一人称代名詞の使用は、他者から物理的に何が見えるかの理解(物理的他者視点)との関連よりも、誤信念の理解などのような心理的他者視点との関連の方が強いことが予想される。

*被験者 埼玉県・東京都の私立保育園の3歳児クラス33名(m=4;1)、4歳児クラス33名(m=5;0)、5歳児クラス33名(m=6;1)。

*材料と手続 1. 物理的視点課題 2種(12点満点) ①かくれんぼ課題 かくれんぼの設定のもとにアンパンマン・バイキンマンの人物と四角柱を配置した紙を提示。鬼のバイキンマンに見つからないように、アンパンマ

ンを隠すように被験者に依頼。鬼が被験者の向かい、向かって右、向かって左の3場面について質問。場面の順序はカウンターバランス。②人形課題 方眼紙上に3体配置した人形の見え方を4枚の選択肢の写真の中から選択。3パターンの配置のそれぞれについて、被験者自身、被験者の反対側の他者、被験者の右側にいる他者からの見え方を選択。質問する見え方の順序はカウンターバランス。

2. 心理的視点課題4種 (16点満点) ①自己信念変化課題2種 a.「ハサミ課題(内容変化)」 b.「アイスクリーム課題(位置変化)」 ②他者信念変化課題2種 a.「パトカー課題(内容変化)」 b.「クレヨン課題(位置変化)」 ※視点課題の順番はカウンターバランス。

3. 属性記述課題 ラポール形成後、自分自身について人物像を語ってもらった。「○○ちゃん(被験者)はどんな子かな?」「○○ちゃんは自分のどんなところが好き?」「○○ちゃんの自分のいいところはどこかな?」その後、保育園で一番仲の良い友達の名前を尋ねた後、その友達の人物像を自己と同様に語ってもらった。適宜、「他には?」「どうして?」などと回答を促した。被験者と実験者の会話は録音し、逐語的に文字化して分析に使用。

4. 保護者への質問紙 対象児が家族や友達・担任保育士に対して、自分のことをどう呼んでいるのかを自由記述。担任保育士を通じて配布回収。回収率は88.8%。

(2) 心的用語の使用が聞き手の説明に与える影響

*被験者 女子大学生18名(m:20歳8ヶ月, SD:1歳2ヶ月)を、心的用語無条件8名、心的用語有条件10名に振り分けた。 *材料と手続 1. 刺激提示 被験者には最初にCAT図版「赤ちゃん」を提示しながら、「これはリスのチロちゃんの物語の絵です。これからある人物がこの絵を見てお話を自由に作っているところの映像を見ていただきます。映像を良く見てから、次の頁から始まる質問にお答えください。」と教示した。そして、同一の女兒(5歳)が2種類の文章を話す映像の一方を提示した。映像刺激は条件に応じて心的用語を含む映像刺激もしくは心的用語を含まないものであった。

「お母さんが赤ちゃんを抱っこしています。赤ちゃんはお母さんが大好きです(お母さんにつかまっています)。そこへお兄ちゃんのチロちゃんがきました。チロちゃんは机の上のお菓子を食いたいと思いました(お菓子があるのを見ました)。チロちゃんは『机の上のお菓子を食べていい?』とお母さんに聞きました。お母さんは『チロちゃんはおなかぺこぺこなね』と考えました(言いました)。それで、お母さんは『食べていいわよ』

と答えました。チロちゃんは嬉しくなっていて(机のところに行って)、お菓子をたくさん食べました。」下線部が心的用語の有無を操作した部分であった。

2. 発話者の印象評定 刺激提示に続いて映像中の人物の印象について和田(1996)のBig Fiveの性格特徴に関する項目(各12項目、計60項目)に加え、実験者が追加した11項目、合計71項目について、7件法で評定するよう指示した。

3. 説明課題 最後に、「今度はあなたに、リスのチロちゃんの物語の絵を見ながら自由にお話を作っていただきたいと思います。その際、先ほどの映像の中の人物に説明するつもりで、できるだけわかりやすく丁寧にお話を作ってください。特に、「チロはどれか」「チロはなにをしているか」「これからチロはどうするか」の3つがわかるようなお話を作ってください。絵は全部で2枚です。それぞれ、別々にお話を作ってください。」と教示し、CAT図版「お正月」「病気」図版を1枚ずつ提示した。図版提示順序は被験者間でカウンターバランスをとった。被験者の発話は録音し、逐語的にプロトコル化してデータとした。

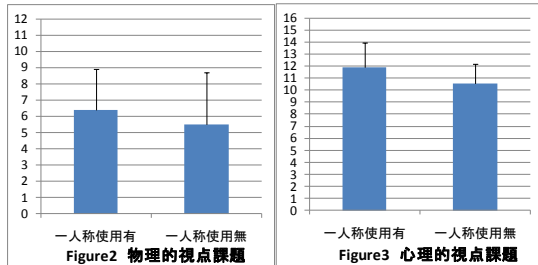
4. 研究成果

(1) 自称詞の使用と他者視点の獲得との関連、心的用語の使用

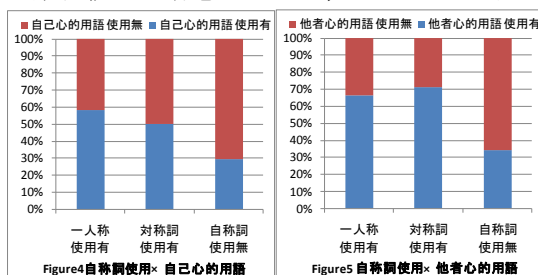
1. 一人称代名詞使用と自称詞使い分けとの関連

保護者への質問紙が回収できた88名を分析対象とした。保護者への質問紙の回答に基づき、様々な相手との相互作用場面で1回でも一人称代名詞を使用することがある子どもを「一人称使用有」、1回も一人称代名詞を使用することがない子どもを「一人称使用無」と分類した。また、相手や場面に応じて自称詞を変えるとされた子どもを「使い分け有」、相手や場面にかかわらず同じ自称詞を使用する子どもを「使い分け無」と分類した。被験者の人数について、学年(3)×一人称使用(2:有・無)、学年(3)×使い分け(2:有・無)の χ^2 検定を行った結果、いずれも人数の偏りは有意ではなかった。そこで、一人称使用(2)×使い分け(2)の χ^2 検定を行った。その結果、人数の偏りは有意であり($\chi^2(1)=43.13, p<.01$)、残差分析の結果、一人称使用有では使い分け有(N=42)が期待値よりも有意に多く、使い分け無(N=2)が期待値よりも有意に少なかった。一方、一人称使用無では使い分け有(N=12)が期待値よりも有意に少なく、使い分け無(N=32)が期待値よりも有意に多かった。以上の結果から、自称詞として一人称代名詞を使用する子どもは、そうでない子どもよりも、相互作用の相手や場面に応じて自称詞を使い分けることが多いことが示された。

2. 使い分け有児における一人称代名詞使用と他者視点取得との関連 結果1.から、相手に応じた自称詞の使い分けと一人称代名詞使用とが関連することが示された。しかし、一人称代名詞を使用する子どもでは相手や場面に応じた使い分けをしない子どもは非常に少なかったため、使い分けをする子どものみを分析対象とし、一人称代名詞を使用するか否かによって他者視点取得課題の成績を比較した。物理的視点得点と心理的視点得点のそれぞれを従属変数として、一人称使用有無を独立変数としたt検定を行ったところ、物理的視点得点 (Figure2) では群間の差は有意ではなかった ($t(51)=0.97, n.s.$) が、心理的視点得点 (Figure3) では群間の差は有意であり ($t(51)=2.03, p<.05$)、一人称使用有が一人称使用無より得点が高かった。以上の結果より、相手に応じて自称詞を使い分ける子どもにおいては、一人称代名詞を使用する子どもの方が、心理的視点取得が進んでいることが示された。



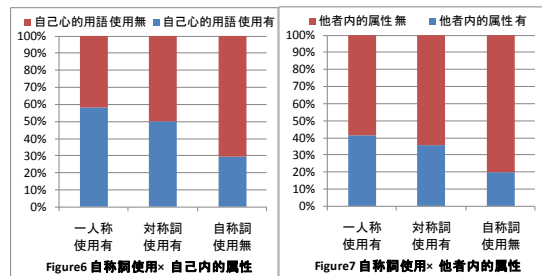
3. 自称詞使用と心的用語使用 2つの属性記述課題において1回でも一人称代名詞を使用した子どもを「一人称使用」、対称詞のみを使用した子どもを「対称詞使用」、自称詞を全く使用しなかった子どもを「自称詞不使用」と分類した。また、各課題の中で心的用語を使用したか否かで、自己心的用語有・無、他者心的用語有・無に被験者を分類した。予備分析の結果、自称詞使用、自己心的用語有無、他者心的用語有無のいずれも学年による人数の偏りは示されなかった。自称詞使用と心的用語使用に違いがあるか否かを検討するために、自称詞使用 (3) × 自己心的用語有無 (2)、自称詞使用 (3) × 他者心的用語有無 (2) の χ^2 検定を行った。その結果、自己心的用語有無では人数の偏りが有意傾向であり ($\chi^2(2)=4.83, p<.10$: Figure4)、残差分析の結果、自称詞不使用では、自己心的用語有が期待値より有意に少なく、自己心的用語無



が期待値より有意に多い傾向があった。さらに、他者心的用語有無について人数の偏りが有意であった ($\chi^2(2)=8.98, p<.01$: Figure5)。残差分析の結果、自称詞不使用では他者心的用語有が期待値より有意に少なく他者心的用語無が有意に多い一方で、対称詞使用では他者心的用語有が期待値より有意に多く他者心的用語無が有意に少なかった。

4. 自称詞使用と記述された人物の内的心的属性

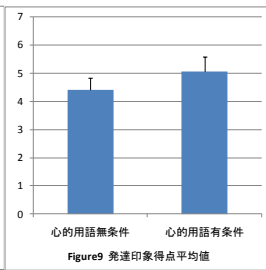
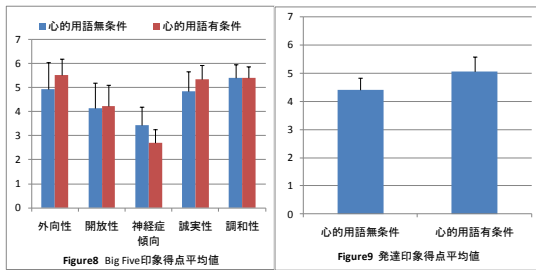
2つの記述課題において内的心的属性に言及したか否かで自己内的属性有・無、他者内的属性有・無に被験者を分類した。予備分析の結果、自己内的属性有無、他者内的属性有無のいずれも学年による人数の偏りは示されなかった。自称詞使用と人物の内的心的属性の記述が関連するか検討するために、自称詞使用 (3) × 自己内的属性有無 (2)、自称詞使用 (3) × 他者内的属性有無 (2) の χ^2 検定を行った。その結果、自己内的属性有無 ($\chi^2(2)=10.53, p<.01$: Figure6) について人数の偏りが有意であった。残差分析の結果、自称詞不使用では内的属性有が期待値より有意に少なく内的属性無が有意に多い一方で、一人称使用では、内的属性有が期待値より有意に多く内的属性無が有意に少なかった。他者内的属性有無については人数の偏りは有意ではなかった ($\chi^2(2)=3.52, n.s.$: Figure7)。



(2) 心的用語の使用が聞き手の説明に与える影響

1. Big Five についての印象得点 Big Five の性格特徴の尺度ごとに平均評定値を算出した。尺度ごとの評定平均値を Figure8 に示す。性格特徴尺度ごとの評定平均値を従属変数とし、心的用語有無条件を従属変数とした t 検定を行った。その結果、神経症傾向のみ条件間の差が有意であり ($t(16)=-2.40, p<.05$)、心的用語無条件の方が心的用語有条件よりも、より神経質な印象を与えていることが示された。それ以外の性格特徴尺度については条件間の差は有意ではなかった (外向性 $t(16)=1.32$: 開放性 $t(16)=.19$: 誠実性 $t(16)=1.45$: 調和性 $t(16)=-.07$, いずれも $n.s.$)。

2. 発達印象得点 実験者が追加した 11 項目のうち、「幼い (逆転項目)」「場をわきまえない (逆転項目)」「年相応な」の 3 項目は、特に発達の遅速についての印象に関わる項

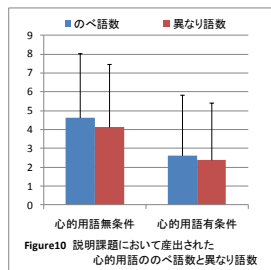


目であると考えられる。そこでこれらの3項目を合算した得点を「発達印象得点(得点が高いほど発達速い印象)」とした。発達印象得点の評定平均値をFigure9に示す。発達印象得点について評定平均値を従属変数とし、心的用語有無条件を従属変数としたt検定を行った。その結果、条件間の差が有意であり($t(16)=-2.85, p<.05$)、心的用語有条件の方が心的用語無条件よりも、より発達速い印象を与えていることが示された。

3. 幼児の心的用語使用が大人による説明課題に与える影響 「発達印象得点(得点が高いほど発達速い印象)」と、被験者が説明課題で用いた心的語彙数との間の関連に焦点を当て分析した。

2つの説明課題で用いられた心的用語のべ語数と異なり語数を、それぞれ被験者ごとに合算した(Figure10)。t検定の結果、のべ語数・異なり語数共に心的用語の有無による違いはなかった。

しかし、Figure 10から明らかなように、被験者が説明課題で用いた心的用語数は、条件にかかわらず、標準偏差が非常に大きかった。すなわち、刺激中の心的用語の有無以外にも、被験者の心的用語の使用に影響を与える要因があったことが推測された。



そこで、心的用語有無条件ごとに「発達印象得点」とのべ語数・異なり語数の相関係数を算出した。その結果、心的用語無条件では、発達印象得点と心的用語数との間には関連が示されなかった一方で、心的用語有条件では、発達印象得点と心的用語数との間に負の相関があり、発達速い印象が強いほど心的用語数が少ないことが示された(Table 1)。

Table 1 発達印象得点と心的用語産出数との相関係数

	心的用語有	心的用語無
のべ語数	.735*	.399
異なり語数	.730*	.407

考察

(1) 自称詞の使用と他者視点の獲得との関連、心的用語の使用

一人称代名詞の使用と自称詞の使い分け

とが関連することから、両者は、他者との関係性の中で自分の立場を調整しながら表明する能力の発達と関連していることが示唆された。対話の場における話し手と相手の具体的な役割を明示し確認するという自称詞の機能(鈴木, 1973)の発達を表していると言えよう。さらに、自称詞の獲得は、自分とは異なる他者の心理的視点の獲得と関連して進むことが示された。

また、自称詞を使用しない幼児では心的用語の使用も少なかったことから、自称詞使用と心的用語使用とは関連することが示された。この結果は、自称詞と心的用語を使用する能力とが共に、他者との区別において発達する自我との発達と関連することを示唆していると考えられる。一方、自称詞の使用は自分自身の内的心的属性を語る能力とも関連することが示されたが、他者の内的心的属性を語る能力とは関連が示されなかった。

(2) 心的用語の使用が聞き手の説明に与える影響

話し手である幼児が心的用語を使用するか否かによって、聞き手である大人がその幼児に対して形成する印象は影響を受けるが、その影響が目立って表れる側面と影響の少ない側面とがあることが示された。

また、大人の聞き手は、子どもの話し手が心的用語を使用するか否かだけでなく、心的用語を使用する子どもに対して発達速い印象を抱いた場合に心的用語の使用を控えることが示された。この結果は、子どもの心的用語の使用が、場合によっては相互作用相手の大人の心的用語の使用を控えさせる結果につながる可能性を示している。今後、相互作用場面において、子どもの心的用語の使用と大人の心的用語の使用との関連に影響を与える要因について、さらに詳細な検討が必要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①長田瑞恵, 「自称詞の違いと印象形成 — 発話者の性別・年齢との関連 —」, 計量国語学, 査読有, 27(6), 2010, 233-242.

〔学会発表〕(計4件)

①長田瑞恵, 「幼児における自称詞の使用— 心的用語の使用および自分と他者についての属性記述内容との関連 —」, 日本心理学会第74回大会, 2010年9月21日, 大阪大学豊中キャンパス.

②長田瑞恵, 「幼児における自称詞の使用— 他者視点獲得との関連 —」, 日本教育心理学

会第 52 回総会, 2010 年 8 月 28 日, 早稲田大学早稲田キャンパス.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長田 瑞恵 (NAGATA MIZUE)
十文字学園女子大学・人間生活学部・准教授
研究者番号 : 80348325

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :